

新冠牧場におけるヨーネ病対策について①

投げ込みヒーターによる凍結防止



- 冬場-10℃以下となる北海道において踏込み消毒槽の凍結防止は一つの課題となっています。
- 新冠牧場では水槽用ヒーターが破損しないよう塩ビ管で補強し、水洗い用の水槽（右）と次亜塩素系消毒剤の消毒槽（左）の2つを牛舎前に設置しています。液替えは3回/日以上行います。

長靴の浸漬消毒



- ヨーネ病に効果の高い次亜塩素系消毒剤に日中使用した長靴を一晩浸漬して消毒しています。容器は不要なポリタンクを加工したものです。

車両消毒の徹底



- 菌の持ち出し、持ち込みを防ぐための基本的な措置です。車両洗浄用の動力噴霧器は冬期に凍結してしまうため、動力噴霧器を物置に設置し、ヒーターで常時暖めて凍結防止を図っています。また、夜間は水抜きが欠かせません。

新冠牧場におけるヨーネ病対策について②

親子分離



- ヨーネ病の蔓延を防ぐ上で親子分離は重要です。新冠牧場では新生子をソリで受け止め、分娩房から別室に移動し、温湯による洗浄及びタオルによる清拭ののち新生子用のペンで隔離飼育しています。親が子を舐めたり、親の排泄物が子に触れないよう注意が必要です。

新生子用ペン～哺育牛ハッチでの単頭飼育



- 新生子ペンで半日程度隔離飼育されたあと、哺育牛舎へ移動します。離乳まで約2ヶ月間、他の牛との接触なく過ごします。

哺育牛ハッチ



- 離乳までの間、哺育牛はハッチで飼養されます。使用したハッチはその都度洗浄・消毒・乾燥し、衛生的な環境で飼育しています。

新冠牧場におけるヨーネ病対策について③



哺育牛ハッチの鳥獣対策

- 哺育牛をカラスなどの鳥獣から保護するため、ネットで覆い鳥獣と触れさせないようにしています。鳥類への対策の基本は物理的に接触させることを防ぐことで、音や光による威嚇などの心理的な対策は継続的な効果が得られないようです。



哺育牛舎水飲み場の鳥獣対策

- 哺育牛舎の飲水機の周囲をビニールカーテンで覆い、飲水目的で飛来してくるカラスと地上から寄ってくるカラスの両方をブロックしています。また、飲水機がカラスの糞によって汚染されることも防いでいます。



初乳の加温殺菌

- 初乳を介したヨーネ病の伝播を防止するため、恒温槽を使用して初乳の加温殺菌をしています。60℃以上63℃未満120分を加熱条件としています。（ヨーネ菌が死滅し、かつ初乳中のタンパクが変性しない温度範囲）

新冠牧場におけるヨーネ病対策について④

牛舎の洗浄・消毒



- 牛舎の洗浄・消毒はヨーネ病の蔓延を防ぐ上で最も重要です。新冠牧場では全牛舎について春秋2回実施※しています。糞などの有機物を水洗で除去し、次亜塩素系消毒剤を散布して消毒したあと石灰乳を塗布しています。
※少なくとも年2回、牛舎によっては3回以上実施しています。

飲水機の消毒



- 飲水機は次亜塩素系消毒剤を用いて定期的に30分間浸け置き消毒しています。
(浸け置き後、排水)

その他、車両消毒マニュアルを整備し外部車両向けに掲示する、衛生管理区域内への立入り制限及び出入域記録表への記入を徹底させるなどにより、外部事業者への啓発にも努めています。